子どもたちを育てたい、町おこしをしたい
「歌」で町を元気にしたい

日野町民ミュージカル実行委員会
会長
田口 享さん（米子市）

歌で町おこしに取り組む

長年、町民ミュージカル実行委員会の会長として支えてきた田口享さん。10年目を迎え「日野の子どもたちに文化的な環境の中で育ってほしい、町の人に喜んでほしいと、始めたときの夢が、ようやくかなってきた」と喜びます。

支えがあってこそ

「町や町の人、保護者など多くの人の応援があってこそはじめて上演できます。いつも子どもたちには感謝して舞台に上がるように話しています」と田口さん。また「応援する100人の会の皆さんをはじめ、町や県からも温かい支援をいただき、安心して取り組めました」と文化的取り組みへの支援を喜びます。

「歌」で町を元気にしたい

公演には町内外から多くの人が観劇に訪れます。ケーブルテレビで米子でも様子が放送され、高い評価をもらっているとのこと。「ミュージカルの輪が県内をはじめ県外にも広がり、これからも高い芸術を目指すうえでうれしいこと」と笑顔。

これからが実を結ぶとき

田口さんは「10年経って、やっと種まきが終わったところ。これから花を咲かせていきたいですね」と、後継者の育成などミュージカルを通して育った子どもたちが、今度は支えてくれるようになることを期待し、これからも歌で町を元気にしていくことを誓いました。

客席と舞台が一つになれることが町民ミュージカルの良さ
多くの人に見てほしい

日野町民ミュージカル実行委員会
アートマネージャー
長住 康二さん（高尾）

日野に来て観てほしかった

文化活動を支える人材育成を目的とした「とりアート2011 キラリ☆アートプロジェクト」という県の委託事業を受け、昨年は出演者として舞台に立った長住康二さんは、今回、アートマネージャーとして支える側に立ちました。「好評を重ね、年々客席は満席に。町内だけではなく町外から『日野』に来て観ていただくことにより、次のステップにつなげるため、この委託事業に取り組みました」と経緯を話します。

支える側に立ってみて

「演じる側では見えてこなかった部分が分かりました。支える人たちのチームワークがすごい。指導する人たち、実行委員会の会員、公演当日のスタッフなど頼もしかったですね」と振り返り、「今は、支える側の充実感を味わっています」と興奮気味。

これからが真価を問われる

「客席と舞台が一つになれることを目指しています。地元の子どもたちが出演しているから身近に感じられる。それが町民ミュージカルの良さです」とやさしい笑顔で話します。長住さんにはこれで終わりではないという熱い思いがあります。「10回目は節目として目標でした。大切なのは11回目。来年は、さらに気を引き締めて取り組みたい」と気持ちを新たにしました。

やり遂げることで自信がついた

10年連続出演

倉間 穂野香さん（本郷）　**音田 信人さん**（高尾）

達成感が続けてこれた理由

音田信人さんと倉間穂野香さんの二人は、2002年の第1回目から出演しています。当時は小学2年生。高校生となった今は、子どもたちを引っ張っています。

きっかけは親の勧めという二人。10年続けてきた理由として「毎年違う面白さ、達成感や感動を味わうことができるし、指導してくださる先生の存在が大きかったですね」と話します。また「舞台から泣いている人を見ると自分も涙が出そうになります」とほほ笑みます。

大きいミュージカルの存在

10年間出演していると二人にとって、ミュージカルはかけがえのない存在のよう。倉間さんは「私にとってなくてはならないものです。演じることが生活の一部になっています」と照れ笑いを見せ、音田さんは「人前に出ることが楽しくなりました。やり遂げたことが自信になっています」とうなずきます。

かけがえのない10年間

指導者との深い絆

「指導してくださる先生のひとこと、ひとことが大切で、ミュージカルだけではなく、普段の生活でも生かせることばかりでした」と二人は10年間を改めて振り返りました。

ミュージカルはなくてはならないもの

協力できることがあれば

ミュージカルに欠かすことのできない大道具と小道具を作っている升井督夫さん。文化センターから声を掛けられ「できることがあれば手伝おう」と始めたのがきっかけだったと振り返ります。

「2回目の公演からかかわり今年で9年目。もともと木工が趣味だったので、今は楽しい」と話します。大工道具はすべて自前で、時期になると自宅から作業する図書館車庫へ運び入れるそうです。

こだわりを持って取り組む

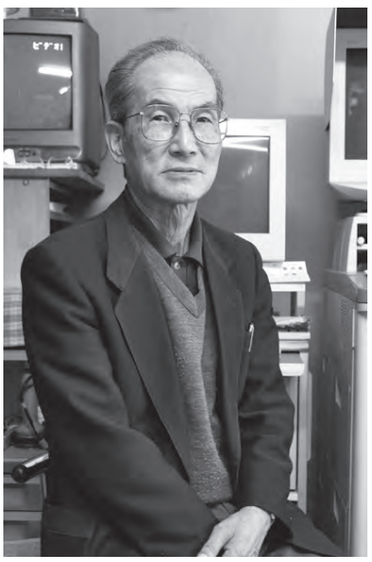
道具づくりについて升井さんにはこだわりがあり、「解体できること」「舞台の出し入れがしやすいこと」「本物を忠実に再現すること」だそうです。「刀でも時代が違えば形も違います。図書館で調べ、忠実に寸法を測ります。前に金持神社の鳥居を実測したことがあったなぁ」と笑顔。これまで作ったものは解体し、文化センターの倉庫に整理されています。

楽しいから続けている

道具類は公演の半年前から作り始めるそうで「台本を受け取るとイメージを膨らませ、必要な道具や材料を準備します」と苦労話も。「演出に沿うよう作り直しもあるが、楽しい」と話します。

一つの公演が終わると安心するが、すぐ次に向け気持ちを切り替えるといいます。「元気なうちは作り続けたい」と次の台本を待っています。

台本を読んで イメージを膨らませる 今は楽しくてしょうがない



大道具・小道具制作

升井 督夫さん（黒坂）